

音声から言葉へ

—ネ・コエ・オトの本意—

ネ・コエ・オトは、いずれも聴覚でとらえられる現象の名である。それらは古代、たとえはつぎのように使われていた。

海原に霞たなびきたづが、彌の悲しきよひは国へし思ほゆ (万 四三九九)
朝びらきこぎ出てくれば武庫の浦の潮干の瀉にたづが許恵すも

伊勢の海ゆ鳴き来る鶴の音どろも君が聞こさば吾れ恋ひめやも (万 三五九五)

……見わたせば 卯の花山の 霍公鳥 彌のみしなかくゆ…… (万 二八〇五)

いにしへよ偲ひにければ霍公鳥なく許恵ききて恋しきものを (万 四〇〇八)

ぬばたまの月に向ひて霍公鳥なく於登はるけし里遠みかも (万 四一九)

鈴が彌のはゆま馬屋のつつみ井の水をたまへな妹がただ手よ (万 三九八八)

とよへつひ み遊びすらしも 久方の 天の河原に ひさの己恵する (万 三四三九)

つむが野に鈴が於等きこゆかむしだの殿の中ちし鳥狩すらしも (神楽歌 八四)

音の上で通うところのまったくない三語が、意味の上では、古代す

でにその区別が曖昧だったのだろうか。気分や音律によって適当に使っていたのだろうか。

ちなみに、現代の辞書には、その区別にかかわって、つぎのような説明がみられる。

A 三省堂時代別国語大辞典上代編 (昭42)

ね [考] ナク(泣・鳴)と語根を共通にする。用例も人の泣く

声(ネヲ泣ク・ネノミ泣ク等のネナクという慣用句として)、鳥や鹿の鳴き声、琴・鈴の音、と並べてみると、物音のオト

とのちがいは明らかであろう。

こゑ [考] 人間や動物以外のものの発する物音をコエといった例は少ない。「いかにあらむ日の時にかも許恵知らむ人の膝の上吾が枕かむ」(万八一〇)は琴の音についていっている。

B 岩波古語辞典 (昭49)

ね ♪ナキ(鳴・泣)のナ。転。人・鳥・虫などの、聞く心に訴

える音声。類義語オトは、はっきり聞える物のひびきや人の声など。コエは、人の発声器官による音をいうのが原義

おと ♪離れていてもはっきり聞えてくる、物のひびきや人の声。転じて、噂や便り。類義語ネ(音)は、意味あるように聞く

*木村紀子

C 角川国語中辞典(昭48)
心に訴えてくる声や音

ね

〔補説〕物理的作用である「おと」と比べると、どちらかといえは感情を刺激されて、快・不快を覚えるようなものを「ね」という場合が多い。

D 小学館日本国語大辞典(昭47・51)

おと

〔補注〕(1)「おと」と「ね」は区別されることもある。多く、「おと」は風や鐘などの大きな音響の場合にいい、「ね」は楽器、人の泣き声、鳥、虫の声などという。生物の発声器官によって調音せられて発する音には、「こえ」とともに「おと」も用いられた。(2)物理的には、聴覚神経が刺激されて起こる感覚、およびその原因となる媒質中を伝わる疎密波をいう。

A・B・C・Dともネとオトとの区別に主に関心が払われ、コエとそれらの別については触れられるところが少ない。それは、現在漢字をあてるとき、ネとオトはともに音であるが、コエは声であり、そうした表記の固定とともに、ネとオトは意味が交錯するが、コエはすこし別であるという意識が、我々にあるからだろう。しかし、少くとも万葉集におけるそれらの正訓表記とみられる用字では、つぎのようにかなりありようが異なっていた。

ネ 鳴27・哭22・音(9)・啼5・泣4・喧1

コエ 音47・声15

オト 音31・声4

数字は、とりあえず総索引による用例数を示したが、かっこを付した音のよみには検討の余地があるものが多く、コエ・オトの音・声にも、どちらによむべきか疑問の残るものがある(詳しくは後述)。と

もかく、万葉集では、ネ(カリガネを含む)は鳴・哭が、コエはまず音ついで声が、オトは音が、いちおう基本的な用字であり、コエとオトは交錯するが、ネはむしろ別であるように見える。さらに、これら用字に限ってみるところ、ネ・コエは音の意で把握もできるが、オトが声である要素は少く、さらにコエもオトもネである要素はほとんどなかったというのではないだろうか。

つぎに、やや稚拙な作業結果を表にしてから、具体的な検討に入ることにしたい。

表は、まず、ネ・コエ・オトを発する主体がそれぞれ何であるかを、万葉集の用例によって、音・訓表記別に数を拾ったものである。他に、岩波古典大系『古代歌謡集』所収の歌謡を一括して古歌としたもの、および古今集・枕草子の例を付した。(中古のものでその二作品を選んだのは、古今集は歌資料としての対照から、枕草子は、その第一段「秋は夕暮……風の音・虫のねなどほたいふべきにもあらず。」のオト・ネの用法が、後世のそれらの語の区別の解釈に濃い影を落しているとみられるからである。実際、先の辞書Dの補注(1)は、岩波古典大系『枕草子』の右の部分の頭注にかなりよく似ている。)なお、「若草の妻も子ども……春鳥の、コエのさまよひ」(万四四〇八)「鶯の、ネになきぬべき恋もするかな」(古今四九八)などのように懸詞になっている場合は、表には機械的に直接上につく語で採った。項目の「鳴り物」とは、琴・鈴・笛・鐘など鳴らすことを主目的にするもの。「も音」の音とは、通常鳴(哭)いたり鳴ったりしないものが偶然出す音響で、弓の音・鳥の羽音などもそこに入れた。さらに、各語が、万葉集で、どのような形容詞とともに用いられているかを下に、おもにどんな述語動詞をとるかを(一部可能性も含めて)右に示した。訓はとりあえず総索引によって採り、疑問のある例を含む場合かっこを付して

オ				ト				コ				エ				ネ				主 体	述語動詞
枕	古今	古歌	万訓音	枕	古今	古歌	万訓音	枕	古今	古歌	万訓音	枕	古今	古歌	万訓音	枕	古今	古歌	万訓音		
5			(5)	46	3		8	3		4		20	13	ヒ	ト	↑トヨム(コエ) ↓ ↑ヨブ(コエ) ↓ ナク(コエ) ↓ ↓(コエ) ↓ ↓(コエ) ↓ ↑ナル(オト) ↓ ↑トヨム(オト) ↓ ↑タツ(オト) ↓					
			1	1			3	1		2	1	6	2	タ	ヅ						
						4	6			5		34	3	カ	リ						
1			1	5	15		(14)	6	1	4			1	ホ	ト						
1			1	4	6		4	3		3				ウ	グ						
				3						1	1	(1)		カ	ケ						
		1		3	1		10	4				(7)	2	百	鳥						
1	1			1	2		10			1				鹿	馬						
					1		1							カ	ハ						
				2	2		1		1	4				虫	コ						
				1	1		1	1						蟬	ヒ						
4			(3)	7	1	1	1	1	4	1		1		鳴	り						
	1		3				(1)							雷							
4	3		2	2			(1)							風	雨						
2	7	2	10	1	1									川	浪						
20		2	10	9										も	の						
	6		3	3										音	聞						
														風							
サ	キ	ハ	カ	ス	コ	カ	ク	ト	ウ	イ	シ	情	カ	ト	サ	形					
ヤ	ヨ	ル	ソ	ク	ナ	ク	レ	モ	レ	チ	ル	イ	ナ	モ	ム		容				
ケ	ケ	ケ	ケ	ナ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	詞					
シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ						

いる。なお、古事記では、これらの語は極端に少く、同総索引によれば、歌謡中にネが一例、本文中に音四例・声一例があるだけである。書紀・風土記には、声・音・響・哭・鳴などの用字でかなりの数があるが、よみの決定と漢語としての意味のあり方とのかかりから検討し始めねばならず、煩雑になるので参照は省いた。むしろ、ここでの考察の後に、それらのよみをなほどこか明確にできるならば、と思う。

ネ

万葉集のネの用例は、はじめに挙げた「鈴がネ」(東歌) 一例を除けば、人と鳥に限って用いられている。しかもその鳥の中で特別に多いカリの場合は、訓にやや疑問のある「朝爾往雁之鳴音者」(二二三七) 以外すべてカリガネで一語的に熟して使われ、それゆえの多さだとみられるから、ネとは、用例数にみる限り、まず何よりも人のネだとみられるだろう。

さて、人においても、用例は二つの慣用句かその変形に限られている。すなわち、「かにかくに思ひわづらひ禰のみし泣かゆ」(八九七) といった「ネ(のみ)なく」の型か、「夢のみにもとな見えつつ吾を禰しなくなる」(三三七二) といった「吾をネしなく」の型(五例中四例が東歌) かで、いずれにせよネは、人について言われる場合、「なく」という動詞とつねに一体である。

ところで、そもそも人が「ネ(に・を)なく」とは、古代どのようなことだったのだろうか。

やすみしし わど大君の かしこきや 御陵つかふる 山科の 鏡の山に
 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつあり
 てや…… (一五五 額田王)
 独り寝て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らに哭のみしそ泣く

(五一五 中臣東人)
いはがねの凝しき山を越えかねて、哭には泣くとも色に出ぬやも
(三〇一 長屋王)

朝なさな筑紫の方を出で見つつ、哭のみそ吾が泣くいたもすべなみ
(三二八 卷十二問答歌)

昨日今日君にあはずてするすべのたどきを知らに、禰のみしそ泣く
(三七七 狭野弟上娘子)

ネは、万葉集中二十九例までが「の、み、泣く」を伴っているが、その「の、み」とは、「せむすべ」なく万策つきて、ただもうネに泣くしかないといった意味での限定である。おそらくネとは泣き声そのもの、それも体の芯から絞り出るような哀切の音声ではなかったであろう。ただもう泣くよりすべがないとは、言葉においても行為においても無力な、幼な児の泣き方に通じる。そして年をおうていつしか泣かなくなっているおとなでも、愛する者との死別のきわには「ネのみ泣く」しかないだろう。それは、この世に在る者にとって、古へも今も「いたもすべなき」ことの極限だからである。「哀、哭、た、て、ま、つる」といったよみで書紀にしばしば出てくる「み、ネ」(右例一五五番のネにもそのひびきがあるが)にうかがわれるように、「ネ、哭」が、さまざまにネをあげる状況がある中で、何よりも葬送儀礼のかたちになっただのはそれゆえでもあっただろう。

ところで、現代の漫画などで「アーン、アーン」「エーン、エーン」などと文字化される子供の泣き声は、逆にその文字をそのまま声に出してよんでも、実際の泣き声にはもどらない。泣き声とは、人の発する音声ではあっても言語音とは異なる非分節音だからである。それは、たとえば法隆寺五重塔塔本塑像北面の涅槃の釈迦を囲む弟子たちのように、いわばエとアの間くらいに口をあけ、息はもっぱら鼻に抜いた発声だと説明できる。そうした非分節音を、分節された言語音のもの

つとも近いものでとらえ表記するならどうなるだろうか。現代はそれを「エーン」「アーン」と二音節にとらえて表記する。古代はそれを一音節で「ネ」あるいは「ナ」にとらえたこととみられないだろうか。

ネが「哭」という表記を主流にしていた万葉集時代、人々は、たぶんまだそこに存在の根底から絞り出される哀哭の響きを忘れてはいなかったのである。おそらく文字化される以前のそれは、もとのなき声により近く、鼻に息をつよく抜きや長く発音されていただろう。そして、ネにもつばら「音」の字を宛てて、とうの昔そこに哭の響きを忘れてしまっただけでも、我々は、「ネをあげる・よわネをはく・ぐうのネも出ない」などと、無意識に本来の響きをどこか宿したネを使っている。つまりそれらは、人の発声器官から出る音声ではあっても意思伝達を意図した言語音ではなく、言葉や行為に行きづまってどうしようもなく出てしまふ非分節音のことである。

ネの実体が本来非分節音だということは、鳥のなき声との類縁性を感覚的に容易にしたらだろう。ただし、鳥のなき声総体をはじめからネととらえていたのでは必ずしもなかったように見える。なぜなら、さきの表を一見すれば、万葉集ではネはタヅ・カリに用例が片より、コエの場合とくに用例の多いホトトギス・ウグヒスではほとんど用いられていない。ホトトギスの一例は、

見わたせば 卯の花山の 霍公鳥 禰のみし泣かゆ (四〇〇八)

と、序として用いられており、音仮名によるあと二つの鳥の例も「かか鳴くわしの禰のみをかなきわたりなむ」(三三九〇)「鳴きゆく鳥の禰のみしなかなゆ」(八九八)と、同様の用法である。序になる例はほかに「朝鳥の啼のみなく」(四八一・四八三)「春鳥の啼のみなき」(二八〇四)と訓読で三例ある。そして、残る鳥の四例中三例とカケの一例

は、概して「トリガ音」と訓まれているのだが、「鷄音莫動明けば
明けぬとも」(二〇二)「鳥音異鳴秋過ぎぬらし」(二六六)「鳥音之所
聞海爾」(三三三)「山近み鳥賀鳴働」(一〇五〇)のいずれも、後統語
句とともに訓にやや疑問のあるものである。

結局、万葉集で具体名を挙げて、その鳴き声をネと実感的にとらえて
いる鳥は、

今朝の朝雁之鳴聞きつ春日山黄葉にけらし吾が情痛し、
海原に霞たなびき多頭我禰の悲しきよひは国へし思ほゆ、
(一五一三)
(四三九九)

といったカリ・タツ以外では、

葦の葉に夕暮立ちて可母我鳴の寒き夕へし汝をば偲はむ
(三五七〇)

のカモ一例だけである。そして、それらは、いずれも晩秋から冬を経て
早春に姿をみせる鳥であること、ホトトギスやウグヒスに比べ一声
が単純で短いことなどが注意されるだろう。ところで、冬は、古代の
人々にとって、貧窮問答歌にも歌われるように、どんなにか「すべも
なく寒く」ネをあげたいほどの季節であったことか。その凍てつ
いた気をとよませて、カリヤタツも、「雁鳴寒し霜も置きぬがに」(二
五五六)「多頭我禰の悲しく鳴けば」(四三九八)というように、寒く悲
しくネをなしているのだと、身になぞられて聞かれたのである。

人の感覚や情感を、そのまま生きとし生けるものうえにおしなべ
て見るのは、日本の風土の中で、ごく自然な発想だったとみられる。

コエ

人の音声にかかわってコエを用いる例は、万葉集ではつぎの十一例
である。

- (1) 月よみの光を清み夕なぎにかこの己恵よび浦みこぐかも (三六二二)
- (2) 朝なぎに 船出をせむと 舟人も かこも許恵よび (三六二七)
- (3) 朝なぎに 水手の音喚び 夕なぎに 梶の声しつ (五〇九)
- (4) 朝なぎに 水手の音しつ 夕なぎに 梶の音しつ (三三三三)
- (5) 氏河は淀瀬なからし網代人舟よばふ音をちこち聞ゆ (二二三五)
- (6) 渡守船わたせをと呼ぶ音のいたらねばかも梶の声のせぬ (二〇七二)
- (7) 大宮の内まで聞こゆ網引すと網子とのふる海人の呼び声 (二三八)
- (8) しもととる 里長が許恵は 寝やどまで 来立ち呼ばひぬ (八九二)
- (9) 神なびの浅小竹原の美しみあが思ふ君が声のしるけく (二七七四)
- (10) 早人の名に負ふ夜音いちらく吾が名は告りつつまとたのませ (二四九七)

(1) 幸ひのいかなる人か黒髪白くなるまで妹が音を聞く (二四一一)

このうち七例が「よぶ」とともに用いられていることが、まず注目
される。他にも鹿のコエで四例、タツ・カリのコエで各一例「よぶ」
をもつものがある(ただし鳥・獣・虫のコエに対してはヨブよりもナ
クといわれるほうが多い)。さらに、(1)~(4)の四首が水手のコエ、(5)
(6)は舟をよび網引する大声、(8)(9)もかなり大きな声とみられ(9)は
オトとよむ可能性あり、後述)、コエは、名のりの声という(10)、やや
抽象的な用法の(1)以外、万葉集では、人のもの言いこと問う声といっ
た趣にはなはだ乏しい。つまりコエとは、言ったり問うたりする行為
によって発せられるよりも、まずは「よぶ」ことによって発せられる
というのではなかっただろうか。

ところで「よぶ」は、万葉集において、

たらちねの母が召ぶ名を申さめど道行き人をたれと知りてか (三二〇二)
吾が背子をなこしの山の喚子鳥君喚び返せ夜の更けぬとに (一八二二)
誰そこのわが屋戸に來喚ぶたらちねの母にころはえ物思ふ吾れを (二五二七)

といった特定の相手を求める「よび」方と、

さ夜更けて夜中の方におほほしく呼びし舟人泊てにけむかも (一一二五)
み舟子を あどもひたてて 喚び立てて み舟出でなほ (一七八〇)

や、さきの(1)・(5)・(7)にみられるような、仲間とのかけ声や合図の「よび」方とに、やや意味を分化させてあると見られる。鳥・獣・虫について「よぶ」が用いられる場合も、「つま呼ぶ鹿(雁・鶴他)」「友よぶ千鳥」などと、おもに「つまよぶ」という形での多数の例の外に、

あしひきの 山呼びとよめ さ夜中に なく霍公鳥 (四一八〇)
答へぬにな喚びとよめそ喚子鳥佐保の山へを上り下りに (一一二八)
秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の音のはるけさ (一五五〇)

といった、高く響く声をたてることをいう場合がみられる。両者を括りその分化の根をさぐれば、「よぶ」とは、もともと「他者に大声をかける」といった意味合だとみられるだろう。そうしたよび声とは、後に狂言などにも出てくる「ホーイ、ホーイ」といった声がまず思いうかぶ。あるいは舟をこぐ水手たちのかけ声なら「エッホー、エッホー」といった声だろうか。つまり、近代外来語の「ヤッホー」なども含め、外でよく通る人の声とは、おのずから口をメガホンのように興行を深く大きくして、喉(腹)の底からの呼気によって出す声ということだろう。それは、今なら「ホーイ」などと表記するけれども、古代「ホー」の音は、口先でいういわゆる両唇音だったとみられているから、もしそうしたよび声を文字にうつすなら「ホー」にはならなかったはずである。声門音の[h]が言語音としてなかったとすれば、それにもっとも近い音は[k]である。

コエとは、いわば「ホーエ」だった。そして、そのように外気をとよませて人が他をよぶコエの聴覚印象に近い音声をもつ鳥(郭公か山

鳩か)が、「喚子鳥」とも名づけられたのである。また、霍公鳥や鶯の「ホットツホットキ・ホーホケキョ」といった鳴き声も、表における用例のあり方にみるまでもなく、コエと聞かれたのである。しかし、その聴覚印象だけならネの感じに近い(と私には思われる)鹿のなき声が、すべてコエでとらえられている(仮名の例はないが、文脈・音律から)のは、それを万葉人は、もっぱら、なげきのネでなく「つまよぶ」ためのコエと聞いたのだろう。そしてそのように聴覚印象からはなれ機能としての意味でとらえられたところに、コエは、すでになまの呼び声としての音声からは切れた、指示する言としてある。おそらく、万葉時代、右に検討した用例の傾向にみられるようなあり方で慣用されていたにしても、人々はもうコエが「ホーエ」だったことには無意識で、ただ人や鳥や鹿たちが仲間によびかける音声、さらには、

梅の花今盛りなり百鳥の己恵の恋しき春來たるらし (八三四)
石ばしる滝もどろに鳴く蟬の許恵をし聞けば京し思ほゆ (三六一七)
衣手葦毛の馬のいななく音情あれかも常ゆけに鳴く (三三二八)

などと、単に鳥や虫や獣の音声の意でとらえ、同様に単に鳥や虫や獣の発声をいうようになった「なく」とともに「コエなく・なくコエ」という形でも用いていたのである。

他の語で言いかえや説明ができにくいような、言葉の基層にある素朴なもの、おおむね、そのものが古代の人々の感覚にもっともつよい印象を与えた部分で、単純に名づけられているはずである。それが、人の音声にかかわるものなら、音声そのままの言語音化が、直接で自然な命名だとみられるだろう。しかも、ネとコエは、人がおのずから音声を発するもっとも根源的なあり方——無力な自己へのなげ

きと他者へのよびかけそのものである。あるいは、歌における挽歌と相聞歌の外來用語以前の分化の根を、そこに重ねてみることもできるだろう。

オト

ネ・コエ・オトの発生本体がそれぞれ何であるかは、万葉集では、表にみるとおりかなり顕著な傾向がある。まず、用例は少ないが、コエ・オトのどれでもとらえられた鳴り物以外では、ネの範圍は人と鳥のみ、コエは人・鳥・獸・虫であるのに対し、オトは、若干の人・鳥の例はあるものの、大勢は、ネ・コエの用いられない生き物以外のもの出す音および風聞のことをいう。しかし、わずかにせよ冒頭に挙げたホトトギスやタツの例、また「鶯の於登きくなへに」(八四二)「人音もせねばまうらがなしも」(二八九)といった例があるところには、少くともオトが、生き物以外のもの出す音といった、発生本体に即した分掌を必ずしも担ってはいないということではないだろうか。それならばオトとは何か——という問いは、現代の我々の感覚からはやらずれる人の口を介して伝わる噂・風聞がオトであるのはなぜかをたしかめることで明らかになるだろう。

於登に聞き目にはいまだ見ず、さよ姫がひれふりにきとふ君まつら山 (八八三)

於等のみに見きて目に見ぬ、ふせの浦を見ずはのぼらじ年は経ぬとも (四〇三九)

いまだ見ぬ、人にも告げむ、於登のみも、名のみも聞きて、(立山を)とも (四〇〇〇)

しぶるがね、音に聞き目にはいまだ見ぬ、吉野川六田の淀を今日見つるかも (一一〇五)

音のみも、名のみもたえず、天地の、いや遠長く(吾王を)偲ひゆかむ (一九六)

音のみを聞きてや恋ひむまを鏡、ただ目にあひて、(汝を)恋ひまくもいたく (二八一〇)

これらにおいてオトとは、傍線を付したところやひとについて、その本体を直目に見るわけではないが、おのずから伝わってくる情報のことである。

ところで、「目に見る」ことは、目をつむればまったく見えなくなるが、「入江こぐなる梶の於登」(四〇六五)「行く水の於登」(四〇〇三)「風の於登」(四一九二)といったオトは、耳を押さえてもすっかり聞えなくなるといふことは少ない。まして、「なる神・なる沢・なる門」といったもののオトなら、それは、耳というより体全体に伝わり、よみ(ひびき)として感じられる。同様に、違くはなれた人や所のこと、みずから出向かない限り目には入らないけれど、オト(風のたより)にはおのずと伝わり知れてくる。「目に見る」に対して「ただちに「耳に聞く」とならなかったのは、耳はオト(音響にせよ風聞にせよ)に對し目のように意識的にははたらかず、したがってそれら非視覚的情報の感知器官として限局できにくいからである。つまり、古代の人々にとってオトとは、聴覚というよりいわば身体に、とよみとして感じられるもの、というほうが近かったと思える。

我々が今、日常無意識に用いる慣用語の中に、遠い前代の人々の語感や意味把握が生きているように、万葉集の慣用語表現には、漢字渡来以前の上古の人々の語感や意味把握をうかがうことができる。そして、

わが聞きし耳によく似る葦の末の足ひくわが夫つとめたおべし (二二八 石川邸女)

八千種に 草木花咲き 鳴く鳥の 音もかはらふ 耳に聞き 眼に見ること (四一六六 大伴家持)

という万葉集では非慣用的な「耳」と「聞く」が結びついている二例は、いわばそうした原始的な感覚をすてて、「目に見る」ことに對しては「耳に聞く」のだという器官分掌を意識的に把握する知的な感覚が、すでにうかがわれるだろう。

とまれ、オトとは、

この床の比師と鳴るまでなげきつるかも

(三二七〇)

筑波嶺の岩も等杉呂に落つる水

(三三九二)

負ひそ矢の曾与と鳴るまでなげきつるかも

(四三九八)

といった具体的な把握に對して、

足の於登せず行かむ駒もが

(三三八七)

名高の浦に寄する浪音高きかも

(二七三〇)

ますらをの輶の音すなり

(七六)

と、發生本体や音質について、ネやコエと違い極度に抽象的であった。ゆえにそれは、

入江こぐ梶の於等たかし

(四〇〇六)

吹く風の於等のかそけき

(四二九一)

霍公鳥なく於登はるけし

(三九八八)

行く水の於等もさやけく

(四〇〇三)

といった、高低・強弱・遠近・音質等について客観的に言及することもできるものである。したがって、オトそれ自体に、大きな音響とかはつきり聞こえる音響とかの意味合は本来全くない。表に示したように、万葉集のネ・コエ・オトに對する形容詞の使われ方は、それぞれの意味にきわめて鮮かな対応をみせている。発声のままの命名とみられるネやコエが、それぞれの発声時のところのありように対応した形

容詞をとるのに對し、オトは、そうした情意性形容詞の対象には一切なっていない。オトとは、その点きわめて物理的に感知される音響のことだといってもよいが、ただ非物理的に伝わる風聞もまたオトであるところが、まことになつかしい古代感覚なのである。

神なり・海なり・山なり等は、それぞれのネやコエではなく、人ではない。オトなせそや……なり高し(風俗歌)といわれるような、足オトや振舞のオトに對照するものである。「なる(鳴)」という動詞にネやコエは応じないし、一般に「なる」と言われるものは、「鳴り物」類以外、なげきのネやよびかけのコエはもたないのである。そのように、オトは本来ネやコエではないものだが、逆に、ネやコエは、耳に聞かれるものだという限り、そのレベルで把握すればすべてオトであるだろう。はじめにふれた万葉集の用字は、そうした把握のあり方をよく反映している。また、そのようなことさらな聴覚的自覚が、さきの「耳に聞く」という言い方とともに、

鶯の於登きくなへに

(八四一 対馬目高氏老)

霍公鳥なく於登はるけし

(三九八八 大伴家持)

霍公鳥なくなる声の音のはるけさ

(一九五二 卷十 夏雜歌)

と、鳥のなき声をオトという若干の用例にうかがわれる。

さて、万葉集のコエ・オトの正訓表記は、どちらもまずは「音」、つぎに「声」であった。したがって、それら「音・声」をコエ・オトいずれで訓むかが問題になるいくつかの例を、さいごに検討しておくことにしたい。

まず、オトの訓をもつ声はきわめて少ないが、その中「梓弓声に聞きつ……声のみを聞きてありえねば」(二〇七)「鳴の羽音の声のみに聞きつ……とな」(三〇九〇)は、風聞とかけられており、当然オトである。

春風の声にし出なば

(七九〇 家持)

吹く風の声の清きは年ふかみかも

(一〇四二 市原王)

はどうだろうか。前者は、代匠記精撰本に「コエニシトモ読ヘシ」とあるほかはおおむねオトで訓まれ、後者は、最近の私注・桜楓社版などにオトの訓があるほかは従来コエで訓まれている。風は仮名の例「ふく風の於等」(四二九一 家持)からみればオト、しかも「清き」と音質がとらえられている一〇四二番こそオトと訓むのではなかっただろうか。

霍公鳥鳴きとよむなる声のはるけさ

(一四九四 家持)

霍公鳥鳴くなる声のはるけさ

(二九五二 卷十 夏雑歌)

はどうだろうか。従来一四九四番の声はコエに、一九五二番の音はオトに訓が固定している。しかし、一四九四番も、さきに挙げた「霍公鳥なく於等はるけし」(三九八八)と同歌人同文脈で、当然オトと訓むものだろう。

とこのふる 鼓の音は 雷の 声と聞くまで 吹きなせる 小角の音も

一云雷の音は 敲みる 虎かほゆると

(一九九 人麻呂)

最近の諸訓は、総体に音はオト、声はコエと訓む傾向がある。しかし、旧訓では、鼓・小角・笛の音は、コエの訓が多い。鳴り物の用例は、「鈴がネ・鈴がオト」(東歌)「琴のコエ」(八一〇)「ひさのコエ」(神楽歌)とあまりに少く、類推しにくい。この場合、鼓・小角(笛)はいずれも何かの合図の意味で鳴らすものであり、その点では旧訓のコエのほうがよいのではないか。雷は、イカヅチと訓んだ場合どうかとも思われるが、少くともなる神の場合は、「なる神の音のみ聞きし」(九一三・一〇九二)「鳴神の音のみにやも聞きわたりやむ」(二六五八)

と、風聞とかけて言われ、明らかに「人オト」に対する神のオトである。

人の音については、「鳥のみかどにおほほしく人音もせねば」(一八九)「鳥はすだけど君は音もせず」(一一七六)「日長く恋ひし君が音そする」(三三四七)「音の少き道にあはぬかも」(三八七五)と、人の気配といった意味でうけとられるものは、後の文献に「オトづる・オトなう」という語があることからしても、オトだろう。しかしつぎの二首はどうだろうか。

まけ長く恋ふる心ゆ秋風に妹が音きこゆ紐ときゆかな

(二〇一六)

神なびの浅小竹原の美しみあが思ふ君が声のしるけく

(二七七四)

前者はオトに後者はコエに訓が固定している。が、逆に訓むことも、どちらかで統一して訓むこともできるのではないか。私は、どちらもコエと訓みたい。

付

万葉集のネ・コエ・オトと、現代の我々の用語としてのそれらがどうつながっているかの一端を、中古の古今集・枕草子の用例(若波古典文学大系本による)をもとに、簡単にみておこう。

まずネは、古今集で人のネをいう四首をみると、いずれもなげき泣くネという文脈で用いられている。

ネに泣きてひちにしかども春雨にぬれにし袖と問はば答へん (五七七)

風吹けば浪うつ岸の松なれやネにあらはれて泣きぬべらなり (六七二)

今こんといひて別れしあしたより思ひくらしのネをのみぞ泣く (七七二)

あまの刈る藻にすむ虫の我からとネをこそななめ世をばうらみじ (八〇七)

また、鳥にかかわる十五首(うち四首カリガネ)中七首までが、人

の「ネなく」ことにかけて詠まれたものである。さらに、万葉集には例がない鶯のネ・鹿のネ・虫のネ・琴のネについても、おおむね、

春立てど花もにはほぬ山里は物うかるネに鶯ぞなく (一五)

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくネに目をさましつ (二四)

わがために来る秋にしもあらなくに虫のネきけばまづぞかなしき (一八六)

わび人のすむべきやどと見るなべになげき加はる琴のネぞする (九八五)

といった哀傷の情とともに用いられている。しかし、コエにも、

虫のごとコエにはたてて泣かねども涙のみこそ下に流るれ (五八二)

蟬のコエきけば悲しな夏衣うすくや人のならんと思へば (七一五)

などとあり、大和物語には「千々さのコエにネこそ泣かるれ」(百二十一

段)と、錯雑した例もある。なお、竹取物語・大和物語・伊勢物語・

土佐日記の四作品のネの例は、各総索引によればすべて十四例(竹取

なし、大和附載説話一例を含む)、その中「ネなく」という形で十一

例、歌中のものが十一例である。ところが、枕草子では、コエやオト

に比べネは表のとおり極端に少く、「ネなく」という形もないし、歌

の例も「夜をこめて鳥のそらネははかるとも」(三三六段)だけである。

以上のあり方から推して、平安公家語におけるネは、「ネなく」と

いう慣用表現に哀傷の意味を残していたとしても、それはすでに本

来の音声的実感をもつ用語ではなく、歌語ないし雅語的な表現になり

つつあったとみられる。しかも枕草子では、ネとコエは、

秋は夕暮。……風のおと虫のネなど、はたいふべきにもあらず。(一段)

秋になりたれど、……さすがに虫のコエなど聞えたり。(二六一段)

昔物語もきこえ明さんとせしに、にはとりのコエに催されてなん。(二三六段)

夜をこめて鳥のそらネははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ。(同)

「琵琶の、コエやんで物語せんとすることおそし (八一)

いとよく鳴る琵琶の……物語のひまひまにネもたてず、 (一九三段)

と、どうみても随意混用されているし、鳴り物においては、コエとオトも同断である。

「誦経のかねのオトなど、我がななりと聞くも、 (二二〇段)

かねの声ひびきまさりて、いづこのならんと思ふほどに、 (同)

鼓のオトも例のには似ずぞ聞ゆるを、 (二六一段)

「乱声のおと、鼓の、コエにももおほえず。 (二七八段)

なお、コエでは、万葉集にはない波や雨風の音をいうものが古今・

枕合せて三例あるが、

住の江の松を秋風吹くからにコエうちそふる奥つ白波、 (古今 三六〇)

楡の木、……五月に雨の声をまなぶらんもあはれなり。 (枕 四〇段)

殿上人あまた声して「なにがし(風)一声の秋」と誦して、 (枕 七八段)

古今集の例は文学的思い入れ、枕草子の二例はいずれも漢詩の用語をふまえたものである。

オトについては、「なく鹿の目には見えずオトのさやけさ」(古

今二七)「奥のかたに……馬のオトなどして」(枕一七九段)「鶯は……

……さらに音せざりき」(枕四一段)「翟公鳥は……オトもせずなりぬる」

(四)といった、いわば気配の意に移ろうとする例、また枕草子に風聞

をいうオトがないことなどが、万葉集に比べ注意される。

いずれにせよ、これらにおいて、ネ・コエ・オトは、その本来の音

声・音響的実感はいちはやく喪失し、よりいっそう聞く者の側の随意

な思い入れで言いかえられていたようである。ただその思い入れも、

無意識にもとの区別を曳いて、耳を澄まし傾けるような感傷的な把握

がなされればネ、何らかの呼応——コミユニケーションの意味合で把

握されればコエ、単に音響や気配として感知されればオト、といったあたりであったとみられる。

ところで、我々もまた、実際そのあたりの意識で、ネ・コエ・オトを使用してはいないだろうか。そして、近代以降の辞書の語釈がともすれば切りすてるそうした表現主体の意識にこそ、人がみずからと世界とのかわりを心にうけとめ言葉でしるしづけようとする際のそのころ——意味があるのではないのだろうか。

注

(1) および「つねよりことにきこゆるもの。正月の車のオト、また鳥のコエ、あかつきのしはぶき、もののネはさらなり。」(一一五段) などによるか。

(2) 卷十「詠雁」(二二二八～二二四〇) 十三首中にあり、他の歌では、雁鳴(5首)・雁哭(1首)・雁之喧(1首)・切木四之泣(1首)・ネのつかない雁(3首)・カリ無使用(1首)で、カリガネで極力表記をかえている。定訓のない初句の「朝爾」を五音に訓めるなら、「往雁之鳴音者」だった可能性もあるのではないか。

(3) 柳田国男「涕泣史談」(定本第七卷所収)

(4) 涅槃図のパターンであったにせよ、中央の涅槃仏とあまりに異質なりアルな群像である。製作時まで「みねたてまつる」現実があり、その実写だったのではないだろうか。

(5) 東歌である。さきに注記した「鈴がネ」や「吾をネしなく」の五例中四例と合せ、みやこ(大和)との微妙な語感・用法の違いがうかがわれる。

(6) 「われを頼めてこぬ男……霜雪蔽ふる水田のとりとなれ、さて足つめたかれ」(梁塵秘抄 三三九)

「アウチノ葉ハニガキ物ナリ。ソレヲ(虫は)ニガシトモオモハテ愛

シテムサボルヲ、」(塵袋 卷四 粧婆虫)

時代を隔て、識字・非識字にかかわらない。

(7) 「大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼び、そ越ゆる」(七〇 高市黒人) は、ネとコエに対応するナクとヨブの意味の違いによって、はじめてなりたつ歌である。つまり、「呼子鳥も(遠くはなれた)大和ではない、てくるしかなかつただろうか。それが、(いよいよつまにこえのとどく)いま、象の中山をよびこえているよ。」という意で、みずからは逆に大和をはなれたここ吉野で、なくしかないといった気持をこめている。どちらも「鳴く」と現代語訳しては、意味がとまらない。

(8) 鈴木眼『雅語音声考』のとらえ方。

(9) 現代でも、「噂がなりひびく」などと、述語のほうは本来のオトに対応していたものをつけて言ったりする。

(10) たとえば、身近に聞くかすかな衣ずれの音でも、当然オトである。はつきり聞えるかどうかといったことが、意味的に何らかのかわりをもつのは、むしろ、「コエ」冒頭にあげた(9)・(10)の例のように、シルケシ・イチジロシといわれるコエのほうだろう。コエとは、はつきり聞きとるることによって、その伝えようとする意味の判別がなされるものだからである。

(11) 大伴家持を中心に、後期宮廷歌人のオトの把握は、きわめて意識的である。

From Voice To Speech

— The original meanings of *ne*, *koe*, *oto* —

Noriko KIMURA

Summary

Japanese *ne*, *koe*, *oto*, are all the names of phenomena, caught by the sense of hearing. It is difficult to draw an exact line between the meanings of these words in the present-day speech.

But inquiring into many of the examples in *Manyōshū* and other ancient books, we can learn their original meanings in that *ne* was a person's cry itself, *koe* was a call itself, and *oto* was such sounds and hearsays as information caught by only ears.